



Vol.35

ゆうことみゆきのふくふくトーク ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で
語り合います。

イラスト/安田千夏

イセボ(ウサギ)



山々が白銀に輝くこの時期、森ではふわふわ冬毛のウサギたちが、雪の上を跳ねてるのかしら：うっとり。

ところで、アイヌ語ではウサギのことをイセボと言います。随分前のこと、アイヌ語学者・知里真志保先生の『分類アイヌ語辞典動物編』に書かれているイセボの意味を見てびっくりしたの。「キイキイ鳴く小さなもの」…まさか、ナキウサギじゃあるまいし、ウサギが鳴くわけないっしょ。さすがの天才知里博士もチョンボかな? そう思いつつも、念のためいろんな人に「ウサギって鳴く?」って尋ねてたの。

するとある日、かつてテレビ局のディレクターだったという女性がこう言いました。「そ

れ本当よ。ウサギはカップリングの季節、結構大きな声で鳴くの」。「ウサギ島」として知られる瀬戸内海の大久野島の取材の際に、何度も鳴き声を耳にしたとのこと。

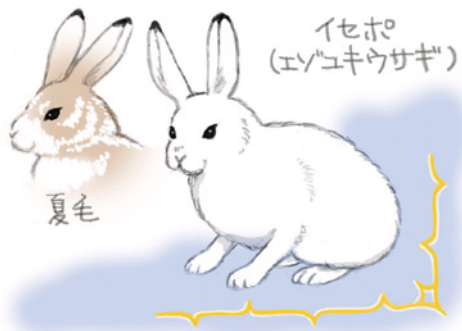
実はアイヌ語の名前には、こういう感じでそのものの特徴をよくとらえたネーミングが多いの。例えば魚のタラはエレクシと言い、「顔に髭が付いている」って意味。え? タラに髭? と思ってた魚屋さんで見たら、確かに顎に髭らしきものが一本…。私はアイヌ語を勉強する中で、それまで気付かなかったいろんなものの特徴を知ることができたの。

ところで後日談だけど、しばらく前のテレビ番組で、「なんとウサギは鳴く!」ってスクープ扱いで報道してました。「ふふ、アイヌの人たちはそんなこと先刻ご承知。そもそも名前の由来がそこですから」。な〜んて思わずいい気分(笑)。美幸さん、ウサギは?



やっぱりウサギといえは跳ねるイメージですね。

ウサギはイセボやインポの他に、海や漁に関係するときはカイクマとも呼ばれるの。海が白く波立つのを白いウサギが跳ねているように見えることからイセボ テレケ(ウサギが跳ねる)



というのですが、イセボという言葉の口にする時、風が吹いて白波が立ち、海が荒れることから、アイヌはイセボを忌言葉として使うのを避けたとのこと。私の住む白老では海漁が盛んだっただけでしょうか、ウサギをカイクマカムイ(ウサギ神)と呼んでいたんだって。

トアトウインソー パーワー エーカイヤオーカイヤオーカイクマランケー チューチュート(海の上手から折れて岸に崩れて陸へウサギが下りた チューチュート)と、ウサギをカイクマと歌うウポポが各地に伝承されているの。岸に陸にと白波が押し寄せる様子を歌ったものですが、イセボではなくカイクマと歌うのは、波を静めるための呪文的な歌だという説も。波が高くなるとは危険ですもんね。

カイクマは、カイル折れる、クマール棒、という意味。折って火にくべる木で焚付けにする木のこと。それで何でウサギ? と語源を調べてみたけど、波をカイクイというからとか、ウサギは木の枝を食べるため木を折るからなど…。本当のところはわかりませんでした。

ウサギの鳴き声、一度は聞いてみたいですよ。きつと鼻をヒクヒクさせながら可愛く鳴くんだろうな〜!

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。